[illegible]記　十

特
ル呂 4
1606
10

洛陽名所集巻之十目録

仁和寺 弘法堂 大門山　玉山　盃池
鳴瀧　妙光寺　砥山　廣澤池 坐禅石 兒石
帯取池　遍照寺　嵯峨　清涼寺
往生院　三寶寺　寂光寺　二尊院
小倉嶺　野宮　有栖川　水尾　天龍寺
清滝川　月輪　樒原　愛宕山
康背山

特 門 1606 巻

仁和寺

堂

○仁和寺

此寺ハ妙心寺の西鳴瀧乃東なり宇多帝。寛平己酉乃年。八月にこの地に堂塔営したまひけん。御室ともいふ。此時乃慶命師ハ真然とぞ。今猶きらびやかに廣殿大堂、いとおほくそびえたり

寛平法皇帝ハ。仁和帝第七乃子也。仁和三年十一月に。位をうけて国政をとり給ふ事十年や。寛平九年七月くらゐを太子にゆづり給ふ。昌泰二年十月廿四日。益信法師をめしておぐしおろし出家し。空理を深く諦給ふ。すなはち書紙たて

てましけり。太上天皇といふ号を辞し。十一月に
戒を東大寺にうけ。延喜元年十二月東寺
にして灌頂を益信にうけ。御室を仁
和寺乃うちに営し。讌宴を精修し
同四年三月円堂をつくる。金剛界会を修し
形像を安置し。誓ひをたてまして勅して御
室を伝法院になされ。五年四月十四日叡
山戒壇院にして大戒を増命法師にうけ
御すゝめに。壇上紫金の雲たなびきけり也。
十二年九月命につき灌頂阿闍梨位を
うけ。翰林次将藤後蔭に上詔し給ひし。

命に法眼和尚位をさづけ給ふ。上皇みづから
闕文をさづけ給ひてし。承平元年七月十
九日崩したまひぬ。寿齢六十五に
ておはしましけるとぞ。

寛空　性信　成典　覚法

右これの人々ともに。仁和寺に住居せり
寛空姓ハ。文室氏。内列の人也。寛平上皇に密灌
をうけ。天暦年中に。村上帝乃勅によりて西寺を移
まかりけるにて。大律師にうつるとぞ。康保元年
に。僧正にのぼる。天禄三年二月六日におはりぬ。
年八十五

性信ハ三條帝第四の皇子。母堂なりもしハ羽林
大将軍済時の女也。ひのやしなひめにおもむく。
より寛弘二年八月一日に。誕生す。十にてはやく
仁和寺乃済信法師をしたひ出家し。志のたゞしく
まして。敏頴なる事。密乗の文学のくしく洞暁
し勤苦つくしせなり。延久に年皇太子病
瘵したまふに。玉顔に宿あくんまし患
させ給ふことし。信に薬師の法修せしめんと
しおほしてより。玉顔さよりのおもとえて。兼暦
元年十二月十八日に。法勝寺の落慶導師とし
なりき。應徳二年九月二十七日弥陀ハ往生となん

歟。端居して逝去をまちけるが。寿八十一
成典ハ仁和寺にすみ。密教をまなびしりし也。
つねに魔魅をおそれ。擁護のため
般若経誦してすごしけるとぞ。長暦二年
僧正になり。長久五年十月二十四日に。年を
ふる八十四
覚法ハ白河帝乃皇子なり。仁和寺の寛助に
ちかづき。密法をうけ。習学をこのみ。のち金剛
峯寺にあそび。はなはだよくうかれて。ひろく衆
法をも請じ。かくなりて。舎主なりてすぐれ
きいたるハ。我小児とも白きにしるされ也

燃哀にたけしきくるしさとく御中なる
小殿ばいぶしかくてしひまでせんかしく孫ぞうな
およそ法またの乃もけるハとつくいひてそ
そくやう拵へしけれハたちまち首をとは
ようしんつまぬ。朝野ともに崇思ならず。
仁平三年十一月六日まで化しぬ

○弘法堂　南むき也なり。もとかやうにしも尾
の廿一日よハ人く信じしたふ事也。さる
三月廿一日ハ。もとく参てあびてしさるし。

大内山

○此山ハ仁和寺のうしろの山なり

衣笠内大臣乃このに遥なる都の乾の宿ハ
大内山のふもとなりけり

玉山

○此山も大内山のならびなり

○並岡　御室よりまへに一むらの松あるを
世ならぶ寛平法皇延喜帝をうらみ奉
給へるときうひ此並岡山にてくるしを
ふしぎなりしぞ。そのあたり俗口にハ此さい
となへ。古今のに　春秋の並岡乃松の山
みな葉ハうる雄花またぎのとくのさけ岡れ
椿森よりまこる桃乃と。ハうまへにほそ

○並池　御室の西にあるところをいふなり

鳴瀧（なるたき）

○是西瀧ともいふ七瀬の一なり仁和寺より七八
町ほど西のかたなり
後徳大寺のになる瀧乃西の川せにみそぎ
せん岩こす浪も秋やちかきと。西行法師（さいぎやうほうし）
にほひくる人めはくもれせのまけんそれ
いかなるすゞにするなの門
けむ小ちゝもお月のあり門ぱはし叡さき氏
竹のし僧をく般若といふ御隠ます
てさ浦く此興ありにばかりてだにはべるまし

此の微笑（びせう）をふくみしや
拈華（ねんげ）ハ花のこゝろも一かしぞまおこうござれ
白のしおぶつらにもんれ秋初の六日よ
竹く末氏の跡のしうゝてのちうきのく。鳴瀧
のはうい里般若といつて四の子ありきて
く僧（そう）いも侍りしにぞ其寺れけりきい
かまハさまのうかいまよあくとしず東へる
うに莫落と見わくし小きゝ山おそろ
ちりひへ谷水をおぶるにりて末の猶君
しりそぐ日まてわ。其ハ錦（にしき）なにほくぬく
なりがめてしにいつしうへ一ゆくを速なりゞゝ。

打も廿山まくさげりのつゝろく出るか
といのくゞつみ寺の名そこしとみちひさ、
今の本のまくかけし橋わたりまして中をた
そこに年かたやうく刀てしかゞにえ
たり人ハうしろうをとこりざそうぱまう
し給ふハぱえめり人のかへる紙ちしめやゝ
なましぱ通るま安はらひうちのか
月しにハ称をそで名菊あけふし
めくわてしいそ蘭のあお花なんとハ
くしこまでぱもやとみよりつくうおぢかけ
揚わ迚ぞまげ見ん出てしし紙の札

排闥減竈の功をも両まてとめてあるま
おことのべくカへくくろ手でにつう〳〵尾そ
家ほとしにせむかまういしふまうに左を
し右まうほくま危りしげ給うてひ右ち
くあう遊びし。給ふまろに日を沈西
東山のさうにそらで林へうそて東み拝ま
涙のめ死ぬつくて人々含五ひの句なく
俳つうらま。おぞうろ乃口をてそはくむへく
なかしねば涯八のつうさのべくさわさるま
むうきるわたし
杖鞋共到離塵境数取蘭葺遊別添畳

峰雲孤靈運屐斷崖石先都説駁寺為
般若光清幽山唱鳴鹿尚卿討何羨鳳珠
花月宴詩觴終日坐晴嵐

○妙光寺　鳴瀧にあり法燈國師の
開基なり
覺心姓ハ常澄氏なり信州神林縣の人なり
こゝに戸藏山の佛にいのり燈さゝけるよし
夢にみてはらみけしこせ十五歳の冬神宮寺
にいり佛書をまなび廿九乃とし薙染し東大
寺にて受具し高野山にのぼりて密にいりて

金剛三昧院のあるじ行勇にまみえて教外の旨を
志りひ又勝林乃項よりもろこし建長元年そうし
め宋域をふみて双径にいたり癡絶に見えし
ことより。ゐ邪の同参源心にあひてかたのみ
靈洞護國佛眼に謁し心即是仏仏即是心
仏如く亘古亘今ことの偈をさづけられたちかはち
印可はうけ宝祐二年すゐに帰朝しけり
仏眼・月林語對御録無門関等はつけし又偈と
さけるを。寫照乃賛なとをこうしかくへまし
建長六歳に。高野の故居にかへりしめの冬。
金剛三昧院に出世し。仏眼まて辦香はつけし

そしばらく遁書し至切なり。弘安四年に。
亀山院の詔のもと。城東乃勝林寺にすみ
永仁三年に諸徒衣資をいだし。寿塔を都
城乃西にいとなみて。寂寞菴となづけたまふ
もしめ帰敬乃ともがら。あまたくれ経唄おほく
そのかみ乃法乃ごとくとなへまうしてはらひ
寿九十二にして遷化し。勅して謚を弘燈禅
師といふ。

○砥山　鳴瀧乃西也。研礪出る山なり

廣澤池

○け池を鳴瀧といへるく。七八町ばかり西にあり。
まはり三四町ありといふ。
釈寛朝は式部卿敦実親王の第二子。寛平
上皇乃御孫なり。寛空にしたがひ密法を
さづかり。永祚二年に。円融帝勅をくだし。密
灌を礼受したまひぬ。後遍照寺をたて
て。廣澤密流の祖とす。永観元年に。円融
寺乃落慶導師となり。封百戸を賜りて
寛和二年に。大僧正にのぼり。長徳四年六月
十二日に遷化し侍りぬ。朝はとよかに声明
をよくしければ。密学のほか。韻彙をつたふ
ことなりき。

藤原範永朝臣に住人もなき山里乃秋の夜ハ
月のひかりもさびしかりけり　為家の哥なり
廣沢乃池をめぐりての柳かげみちそふ
のこる田てもみつるか
嘉應二年の秋。後光明院名所の作文。叡覧
なんとの勅ありて余の師冷泉中将為景朝臣
浅亭にして。詩歌乃会催されし兼題ハ
廣澤池眺望なりと云なり。ともかくたのしく
著述しけるに。又六百番の歌合にも。ひとしきところ
によるの名乃三の人数それぞれ録されても有けるに。或ハ池
この柳みどりに。まねきしつくやまもしさそて

五月雨ハとしやふりたる〇の松。波のまうつる浮
きくさもなく。月ハしらしかあるやうに。雪ハこそる
白たへなる梢そ。積なりのあなたしとしもそ
○坐禅石　廣澤の西なる山にあり。観賢僧都の
坐禅せられし石となり
世の讃て僧都登天せし石なりとも。今も西の浮
おりやうかしハ。終の為又の志てくるとぞ
又観賢の姓ハ秦氏讃州乃人なり。聖寶の上足也
延喜二十一年。帝。夢中に。弘法大師。奏言ありて。
紫衣一襲をおくらせられしとき。賢をとつてび
けるし。御使かくたり高野山にまうる。宣旨

とおりぬるに。儀容をさぶらうしねば作礼
默許して。瞻仰しけるに。紫顔のたちまち
衣裳を着し。時に淳祐童子か
まゐらせける。かひなくして。尊容をおがまされ
ども賢覚が事をとりて。定鞠ひなでさせけ
るに。ひざのもと。暖暖として。其のち
ごときし。薫風くをきくさぎるとぞ。諸衆
皆見るところなるまじ。後世淳祐の
者のむせらうにとびゐきんをのこく。石山
にくつさん。されて。村上の賢和尚の賢
若寺を修理して化けれしとめ。延喜十九年

醍醐寺の座主に任じてよろこびの職おふれ
す。延長三年に。僧正となりてのち。六月
十一日に。遷化しぬ
児石　出禅石にもとつくしてなる小柱石也が乃
僧都の児なを常に居るところなりしもの
廣澤乃坤の方に小社あり。その池のほとり
いふなるを。世にはいふの児僧都にわたまて
その池に身をなげし所なり
○常取池　廣沢より東也。路のほとりに。ぐ
ここそ。是なむ。むかしいづくで。けいち
の霊あびて化して。人をおどろかせて

遍照寺

○此寺ハ廣澤の乾にありしが。今ハその舊跡だにさだか
ならずなりぬ

大和物語に良峯少將宗貞嵯峨天皇の后なり
うさ名立しゝ。帝おもくつかせ給へくぞ。その末の
后までめでさせしかんど我ゆるし。其の寵愛よ
ふかき成りあるに。人志ばかりまで乃ちに此時
まつり御蔵のもとまでより御衣のもとそ誠了
よ。同法おかくれたりけるとひたりければ宗貞ぞ
まで心ふかくの也色衣ぬぎやけすてたまへとせさせ給へ
むそろぢなりにしてどうも仏道をもとも

此三のよめでさせたまひけるをもりひ給ハ
ざりしかバ。終に世をいとひ。遍昭と名号ぬ
とぞ。又帝かくれさせおはしまして後。此時
入道にはじめしともいへり

釈遍昭俗名ハ宗貞。門下侍郎良安世子なり。
わかく羽林にのぼりて後。仁明帝の近
侍となり。寵遇にほこりしが。嘉祥
三年三月に帝崩じ給ひし。哀慕にたへず
おもひの余り叡山にいりて。薙髪し。慈覺
の許にまうで天台の密教を授かりて後。
勅して惣持院に入三部灌頂いみに座主圓珍

りうけ、講説をおこなひ、朝野にこぞりし給ひて元慶三年に僧正となりぬ。光孝帝殊にしたしみふかゝりしかバ、此の年、封百戸をたまはり、またこれより元慶寺の座主に補せられ、寛平二年正月十九日に遷化しけるとぞ。年七十にぞなりける也

遍照寺の少住法師、池の魚を日来ひつけしく堂のうちにはしくぐえはまうさて戸をおけさせ、入りたりけるに、魚を入てつれなくこめておこなひけるところにけしからぬ事をおもひおこしくしくやまひつくるに、章(?)かわくハやがて

今はのちまきハ村かみをのくどくとおもわく入てみるに大庭ともみへずめさおくる中に法師ましますく打ふせ給ちうわしぬれハ此法師をとらへて所より使廳へ出しうりわたしたりけれは乃ちをとらびまのけさせらく禁獄せられ名基俊大納言別当の時よなん侍りけり

け来は此まくみまみうけてのこぶへるもまこしもなのまと八僧正の訓誡きびしくおくなりけるとし

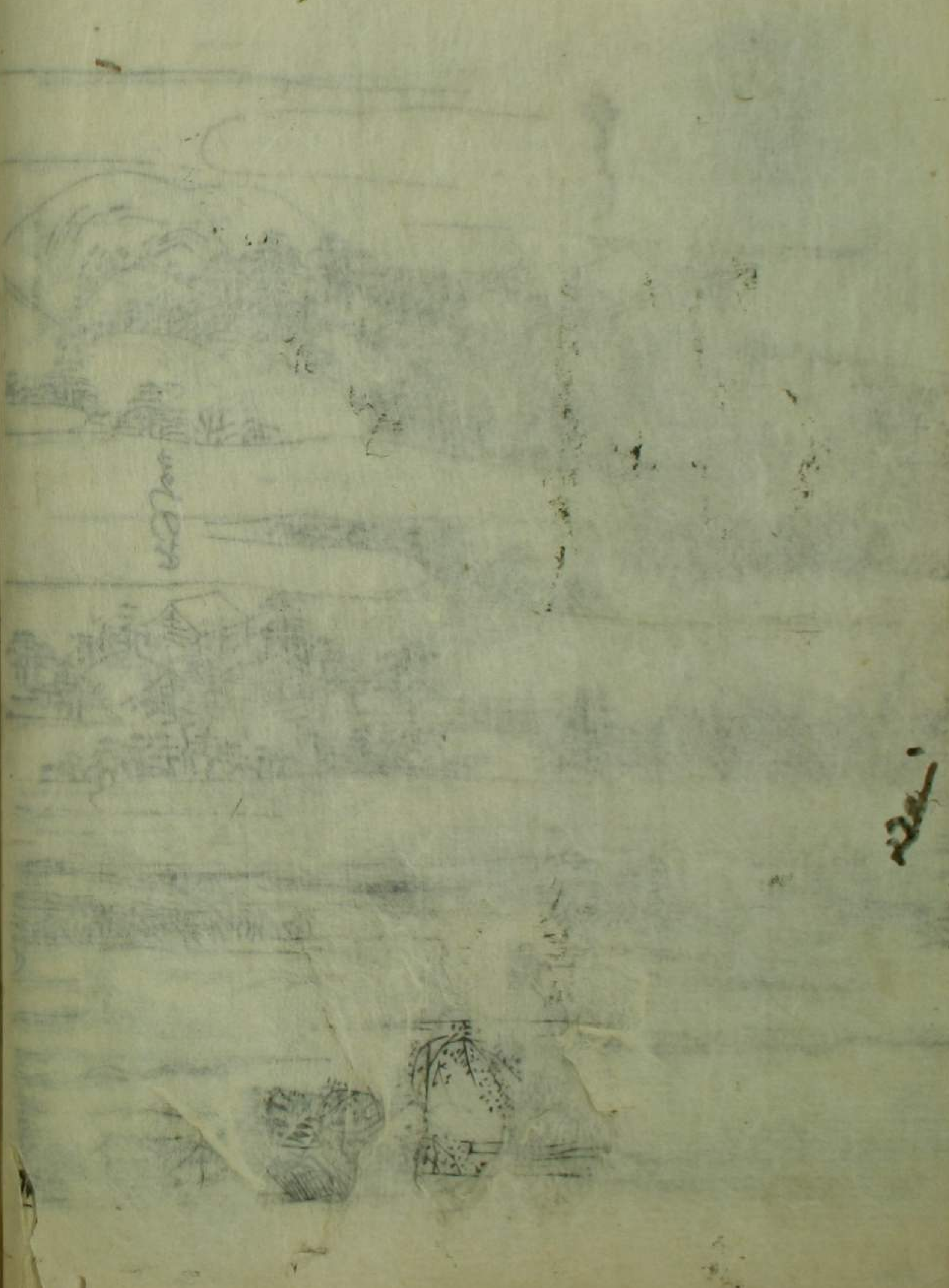
あたご

のゝみや

西ほうし
まつのを
ほうりんし

嵯峨　佐角野　山

○此所ハ洛陽より二里ばかり西なり上下の
二所あり里村おほく有ともさびしくいや
しの所也侘居ども見えしなり
長久二年八月松尾に幸ありける時春宮の女房
車に嵯峨の花をとのざしてかへりの次
まうでなりしが見侍ける時近衛の司
あまたのくるまにて侍りける蔵人の車の文
しいうちよせくるみ侍る中納言資綱
立のりはなのくるまとしけ花蔵
わたりぐるくみ見あるかれし



権中納言俊忠卿の子にて。ほどなくたぐひなきさ
その跡をたづねて昔乃跡をもとめられ。
定家卿のに。継ひおなじく秋のさがの
庵にすみて草乃露よなきはか
この秀名をおほく代々の人いろ/\かきな
のめし。詩歌を入たてまつりやまさるとなど
をなされけるとし
然じ慶安壬辰乃とし。季の夏下旬我師
冷泉為景朝臣。後光明院乃勅定によりて。
おほたに。要書にのせおかれしとかや。
打も閑窓に[illegible]なりて。そのかみ嵯峨小倉

よしてさよはこの乃ひとしびおのれ
知還軒に心をよせに縁居せられし時。予もか
いち附従しもろ/\の書を。校訂なりし
ゆるしめ。日夜数首乃詩歌をまじへられ
かくなん

梵天従駕佐御郷奉勅数携書案箱擂
釈堂遶廻野径知還軒裡入林塘風鋤深草
雲重色雨洗脊皇月融光詩酒遊情獨寂
離塵眼界自清渲

又小倉山乃麓に八幡宮いとけなき社
あり。そのかたはら厳かに桜にまつる人

くおとろへくの作ゑことゝの人作をれ
けり。朝臣も一つ
彷彿昊廣前奠酒白飄然攀桂小倉嶺洗衣
大井川心弟手山似世身静日如年半煙白雲上只言
羽化仙
余これ韻作に
攀躋旧社前心礼自凄然離俗坐庐阜釣閑
望穎川樹林雲漏晋水右不知年外嶺徳猶
邵一人包八仙
ゑく乃息とてまたお作のあり。又紀還軒より
ゑくなして朝臣十景の詩。

獻岳晴雪　雛瀬飛瀑　遍昭孤松
愛宕雷樹　古墓晨鐘　幡山霊社
嵐嶺白桜　仙翁麦浪　亀渚霽月
雄藏紅楓
十景これなり
余が息父渋橋女我もとぶらひきくゆかりなれ
ばあはれくし。其作りへ十景れ吾のことの
教をうけて侍るに朝臣数作乃うちうちそれ
思ひ又よくろすがころへ作のにおゐて
なつしめ懐義とまとめり

清凉寺

○此寺ハ小嵯峨乃内のくろ也。釈迦堂といふなり。南むきの堂なり。本尊ハ毘首羯磨が作にして赤栴檀をもつて容や。開山ハ奝然法橋なり

奝然ハもと東大寺にありて三論をまなび。又密乗を元杲にうけ。永観元年秋渡唐し入り。東大寺よりの書を青龍寺におくりき。比叡山より仏法を天台山にひろめける使也さて汴都乃西華門外なる聖禅院にてあらたに優填王乃像を私し仏工張栄に模刻をなさしめたり。太宗奝然に日域乃皇帝系暦をとひ給ふ。然るにこたへまつりなぞ乃ゆゑに紫衣をたまひぬ。されど辞しさつて五臺にのぼり。雍熙三年台州の鄭仁徳が船にのりて永延元年にかへりきぬ。然るにいまち大蔵経五千四十八巻十六羅漢の画像かの優填の像をもちきたりて此寺にをさむ。長和五年に寂しぬ

往生院

○此院ハ清涼寺の西二町乃小嵯峨五辻女のそばにあり。開仏等が人れの像を

妓王妓女とよびしハ平相国清盛入道殿へ
せし白拍子なりしが仏のおこりて
らひ又白拍子仏といふ者来り相国
へ推参しけるに入道妓王にハ心ざし
うすくなりて仏をめでて妓王ハいとま
仏ハ入道を恨んと言ひしかども
くやしくてかへりけるに相国よりめされて仏
まへにて今様うたひて入道にまゐらせしを
人の心のうきことを思ひ入道さへ
いのちもこそあれとて仏へんを
はじめとして妓王をなぐさめおもひ出

し給ひぬかひなくて入道の常に見給ふ
障子に萌出るも枯るもおなじ野辺の草
いづれか秋にあはではつべきとかき給ひ
出さるるにも妓王の事を思ひ二人を
めされしのちハつらくおもひぬ
入道にみえて仏の前へ出るところを
んようにおもひけれバくるしさあまりに
こりしこの身のうきをみれバかなしく
て給ひにのぼりて母とぢもろともに
衣をそめて此寺に住みけるに仏も
まことに我身のうへと思ひて

くなけれバ。相國の亭を越て嵯峨の奥にむすび
いくバくもなく。しかも仏門に入て
剃髪染衣して母とともにこゝにすみ念仏
のこゑたえず。妹も同じく尼となりし
妓王ハ廿一。妓女ハ十九。仏ハ十七なりしと
しことにあハれにもあさましくおもへハ
おとなしき事ハ少しもなく。後白河
法皇長講堂の過去帳にも。この人々の名を
いれられ侍るとかや

○三宝寺

此寺ハ二尊院の北。往生院の南にあり。滝口
入道のすみし寺なり
滝口時頼ハ三條斎藤左衛門大夫茂頼の男。小松
大臣の家臣なりしに建礼門院の女房横笛
といふ女に思ひ初けれバ。父茂頼いさめて
しかりけれバ。時頼思ひきりて
十九歳にて出家し。嵯峨の往生院に行て
ける。横笛ハ是を聞て。泣々尋ねて
横笛もまた出家し。奈良の法華寺に住
侍りしとぞ。滝口入道の住し所
うらみしのこるも。横笛の
しれとも。やつれて。横笛

しても なほつらからん横笛をみすてし
べきんぬるぞかくれなく仏にしても
瀧口ほく貴妃聖也けれ。維盛入水
のしるべ。戒師となりしぞあはれなるさまは
平家物語に見えたり

寂光寺

○此寺ハ二尊院のきたならびにあり。開
山ハ定家の山居色紙の和哥書し所なりとかや。しかれば
日蓮宗の寺なり

黄門定家卿ハ。中納言三位俊成の男。和哥の中興
なり。母ハ若狭守親忠の女なりとかや。応保
二年に誕生。四条院仁治二年八月廿日正二位
中納言にして辞す。歳七十九。法名明静と名のる
新古今選者の中の
一人なり。新勅選ハ定家の独選也

二尊院

○此院ハ釈迦堂の西也。本尊ハ弥陀釈迦の二仏なり
故に二尊院といふとぞ。是ハ嵯峨帝の勅願となり
或時藤烏丸光賢公此寺にまうで法然上人の御影
をおがみて書つけられける。けふは弘法大師の
てがらにて後日小法然上人にうせしぬ。
御影をそのまゝ写さるゝはかなき事にぞなり

法然上人こハあまりきぐりといひまして切ゝ
登蓮の足跡をあらハしたることなるかたしはまり足
出の新くそいふ
ちかきころ二条摂政康道公乃御墓足利乃山
乃のとれきてゐりをまもなりかくしき跡いのり
そのち

小倉山嶺

○此山ハ二尊院のうしろ也
紀貫之の哥に夕月夜をぐら山になく鹿
乃こゑのうちにや秋もくるらん　定家卿の哥

に小倉山時雨る比の朝なゝゝきのふハうすき
よもの紅葉ば　又西行法師嵯峨山
の里にて紅葉ちりしハ猶くもり月とゝる
かなあり
後鳥羽院御のあとりにも藤原おもひし悔し
さつのゝのにぞふかき乃色けふ染めるま
ひてぞよせられしま　おほく梢の薪ハ
あまり八の末乃ちるまでもちみくけふり
たつぞのふかくてまつもる慈鎮和尚
みつぐらしてやくまもりもし御詠
まつりなるまで

野宮

○此宮ハ天龍寺より北西二丁ばかりの邊なり。
今の世も小社あり。黒木鳥居小柴垣なともその
むかしを思ひやるべし
野の宮ハむかし斎宮の御所なり。上古の
頃事あり。斎王に定まれば禊をして、まづ此宮に
まづ備り給ふよし後り三年ひさしくこもり給ふ。
卜定とぞいふ。さて初斎院へ入給ひんとて潔斎す。
明年野宮へ入給ひんとて禊す。又明年
伊勢へくだり給はんとて禊あり。三年目ハ
九月頃八月よりなく野宮より発向ありしなり。
斎王伊勢下向の事、延喜式に詳也。竜(?)鳥居
勢物語の野宮の事ハ紫式部の源氏物語の
賢木の巻に野宮の事ハ委しく見えたり。

有巣川

○此川顕昭云、此宮の前の川をありすとも(?)斎院のほとりの川なり。
なり小川なり
京極摂政家 松枝映水ニと詠ぜしなり。千歳振
此の宮乃前の有巣川 松にもかけて見えしなりけり
とよみ給へり
或説ニ太秦より法輪寺へ流るる小川

をのふやさまハ嵯峨野の北寺に。此川をハ
行のいふそと舩渡にこの世をへハ いさきよし
こ津〇ハさらにある菜川、右の北寺裁して〜ハ
みめぐらかめ里

又説ニ有栖川といひ形ゝりすゝるハ。下嵯峨の
江の鱗こいふ茶をまへりあにある小川哉云
傳へたり

私曰野々宮へり道て。藪林わり。さ内の小河哉
いつうみやいの

水尾

〇此眼ハけりしづへりもみち里寺とも

天龍寺

〇此寺ハ大井河のきしにちかく
夢窓姓ハ勢州の源氏にして宇多天皇九世の孫なり
母観音にいのりて。金色の光明をのむとゆめみて
はらミぬ。そのまゝ十三月にして誕生す。四
歳のとき母にわかれ。九歳の時平塩教院にいりて
経をよむ。十八歳の時七日。法華を誦し。母の恩
に報じ。ミづから母の死屍九変の相を画て。坐禅
観想し。十八にして東大寺の慈観律師に遵て礼し
奥義をうけ。二十年のころ顕密の教をならひしかど。
捨て大乗の證明をきはめて。夢中にたゞ禅をもとむ

百日堂上に出ておめしましして朝満の日をつくる座中
悦然として多年のうらみを一億まかりしらぬ宝蔵は
ひきくてめぐりまりては寺を建石とし又なるにして茂
なるは石頭と云て内に一人の老者ありて房舎を
むかへからて或は一畳と云なるをくわえんよう其邦
と云ひしまさくみえらるまして達磨大師の尊像なり
此まことより志をさらしめ得て参禅せらるく堪能の
陳石とのくらめ宿をは云のみて云弘法大師の
天龍院の禅僧を招く禅宗宗国師霊亀山天龍
禅寺の開山夢窓国師と云観応辛卯年七十七歳
にて入寂をせらる

清滝川

此川は愛宕の山のふもとや
愛宕山より出て流れ人の水のすこしくけかれ此川をあらふ垢
離しみつく信念ぞ行ふなり
後成の寺に石ありて水のきよくて玉散るにて
てる清滝川は名におふ月影
西行法師がいうにし高嶺おろしの雪とけて
くり清くさき河のなかれしし波
僧正日意が集めけるや和歌に珍しん
清滝川のせぜのきえしらぬ
月輪

○此寺ハ。愛太子乃ふもとの康世太政大臣兼實此
釼建ありける桐國の新某外経しされ古跡あり
しぞ。收拾遺まさ乃日に極ねやとなみゆへ
まゝに居給ふくなふなりけるぞくらうしハこの
心なるべし

樒原

○此歌ハ阿太胡山のふもとや
曽祢好忠のにつゞきて山ぞさかりのころに
雪はれて。花さむ人の跡ずなし。又春
かぜに。通ひし人ハ彩ハにたまも見えぬかな
樒の原よふきれたる雪

愛宕　愛岩護　阿太胡　愛太子

○此所ハ。清涼寺の乾乃、、卜ぶりうこん也。わうハ一所也
天台宗に百済國の日羅と云。霊也二臺なと。大ごん法
文武天皇の御代に役の行者角小雲遍上人澄泰と傳へ。此山よ入して
雨雷ありて地藏龍樹富樓那毘沙門の四なる深なの所を祭
二人咒縁しけるに。天晴たりも有智らくかんばかく寺に
奏し。此所ばかりよ。朝日山建立し　臭見二神社考ニ
慶俊ハ。藤井氏のもの。山城の人なり。道慈
に法の人て。空海のなまるび。大安法華經の
寺にもとゝ愛宕山をひらく。第一世たる。
天應元年。僧都となりまう。性悲厭婦の

こゝろくぐ貪瞋癡をもひるがへすとかや
秋長といふ人の石名のこ高尾の山といひ伝へたる
人こそ愛宕の峯ありやこのもんほく[illegible]
いはれなれ高尾山とはいひならはしける物語し

こうのせ山

釈仁鏡ハ南京の人なり父母伽藍神にい
のりまうけし子ども九歳にして東大寺
にいたりて数法をならひはじめて戒
律をたもちあまねく菩提をもとめて後
愛太子山にいたり阿闍梨はしめて師に
白雲寺にして現にころもを得て侍る

水尾山の下の[illegible]千日詣でる者[illegible]
たゞふく人のかしよう九折[illegible]
しますに[illegible]醉翁亭記[illegible]書[illegible]
も若休千樹前者呼後者應[illegible]
らしとおもふくしう[illegible]

鹿谷山

此山はむかしこのふもとにすみ[illegible]
僧恵法師といふ人郡[illegible]
の世もを[illegible]
公實歌に[illegible]
ならく雪ふりけり衣の世也